

私は今年、それもつい先日はじめてテレビを見た。いや聴いたと云うほうが正しい。「何んだ、それなら十年前も前から恩賜会館にあるじゃないか。」と友だちに云われるかも知れない。しかしテレビ会場には操作係がいて、その日に受像するものと使用時間が定められ、それ以外個人でふれることは一切禁じられているのである。だから受像中にはいつも満員なので、見えない身が割込むのは遠慮だし、と云って済めばカチンと鍵がかかってしまうのだ。それで一度音を聞いてみたいと思いつながら長い間果たせなかったのである。

ところが今年二月から個人テレビがようやく許されることになった。一つ、二つ、と寮の屋根にアンテナがたち初めたことは言うまでもない。こうした或日の私は耳よりな話をきいた。ゆみさんも虎の子をほたいてテレビを買ったという噂である。坂上と坂下に寮が遠く離れているので、私から訪ねることは稀だが、ゆみさんと私はまったくうちとけた気兼ねのない仲である。

行こう。私はすぐにそう思っていそいと靴を出した。大切なゴム靴である。今はすばらしく体裁のいい化繊ものばかりで、店頭にはゴム靴など影も形もない。聞いてみると、「そんな物はもう製造していません。」と云う。これは眼と指を失った私にとって大きな打撃である。ゴムなればこそ融通がきいて、大きめの物ならどうにか一人で履けるのである。色や恰好がどんなに良くても、外出の度にいちいち人手を借りるのでは身が縮む。

外へ出ると風がじつに心地よい。青葉の匂いが胸の底までしみとおる。私はゆうゆうと杖を歩道にあてた。と云っても手先では持てない杖である。やむおえず小脇にかかえているので、カチ……カチ……などと気のきいた音は出ない。そのかわり古色蒼然の靴が、ガバツ、ガバツ、と鳴る。それに和して電線に並んだ小鳥たちのお喋り。煮えているジャガ薯の匂い。玉蜀黍の葉ずれ。谷の向うの犬の声等々。日曜の道はまことにのどかである。

藪池へ着くとゆみさんがびっくりした。思いがけなかったからであろう。

「テレビを見せて貰ってきたのよ。」と云うと更に驚いた。しかし私の望みを知ると、無言で伸びたゆみさんの手が、そっと私の肩をなでた。

テレビは料理の時間であった。たちまち出来る海老フライや、フルーツサラダがとても美味しそうにみえるらしい。廊下を通りがかりの人が覗いて、ほーほーと云っている。次は踊り、伴奏のいいこと。ラジオよりよほど柔な感じである。そして室の雰囲気がちがう。わたしは写面につれて動く、人々の、哀楽の声の表情をきいているうちに、今更ながら沁々眼の尊さがおもわれた。

気安いままに長居をして、戻りは四時近くになってしまった。瀬戸の夕風がはじまる頃である。じつに暑い、が、私の足は軽かった。探らせて貰ったテレビの外郭、教えられた色彩、ブラウンカンの大きさ、スイッチやダイヤルの場所まで、くりかえしくりかえし心にきざんで歩いていたからである。

我が家に辿りつくと、気の弛みもあつてか一度に体が燃えてきた。急いで扇風機をかける。あ、—この風—、これこそ全く拌みたい程ありがたい。すべてを節約しようやく買った甲斐がある。これまでの私は夏になると喘いでばかりいたものである。麻痺部が多くて汗の出どころが少ないため、とても辛いのだが煽げないのである。時には苦しまぎれに、ゴムで掌に団扇をくりつけたりするが、これは労して功なし、かえって暑さを増すばかりである。私は扇子や団扇を自由に使える人たちがどんなに羨ましかったか知れない。その頃こんな詩を作った。

手の喪失

山がいよいよ峻しく溪がさらに深い陰影に  
覆われてしまったのは

お前が無縁のものとなってからだ

それから向日葵がいくたび咲いたであろう

花冠にがちりと太陽を受けとめて

決然と立つ夏の王者

そこからの金箭が私の額を射るとき

私はいつも恋しのぶのだ

おまえをせつに

しかしおまえの記憶にもう私の倂はない

ああさまざまな手から彩りをこぼし

私の周囲を舞踏するものよ

その優雅なるもののおまえに

私は朽ちた一本の柱

私はもうとこしえにお前を呼ぶことはできない

路傍の石くれのようにただ黙々と

炎暑の中にうづくまっているのだ

扇よ